

生糸の世界市場における上海器械糸

曾 田 三 郎

はじめに

上海では、まず外国商社の主導の下に製糸工場が開設された。民族資本の製糸工場が急速に増加するのは日清戦争後のことであるが、その後いちど反動が生じ、安定して増加し始めるのは二〇世紀初になってからである。この上海における器械製糸業の発展をもたらした国内の諸要因についてはこれまで¹⁾に検討し、それに内在する問題点についても指摘してきた。

中国の近代製糸業の発展をもたらした要因について、国内の経済的諸条件の改善にも注目すべきではないかという意識が強かったため、これまで生糸の市場の問題についてはあまり言及することがなかった。日本にしろ中国にしろ、器械製糸業は外国市場との結びつきが強く、器械糸の大部分は外国へ輸出されていた。従って、中国における器械製糸業の発展

について考える場合、やはり外国市場の側から規定される面を軽視できない。

一九世紀中頃に生糸の世界市場が成立して以降、イタリア生糸を中心にしたヨーロッパ生糸や日本生糸と対抗しつつ、中国生糸はそこにおいてどのような位置を占めたのであろうか。また世界市場に占める位置の有様は、製糸業をどのように規定することになったのであろうか。中国生糸は輸出港によって上海糸と広東糸に大きく区別できるが、本稿では、上海糸のなかでも上海器械糸の位置について考えてみたい。

ヨーロッパではやくから器械製糸が発展し、一九世紀中頃の蚕病の流行によって大きな打撃をうけたものの、その後もイタリアを中心に一定の生産量を維持していた。日本では殖産興業政策が展開し始めるなか、一八七〇年代から器械製糸業が急速に発展していった。広東とともに器械製糸業の発展した上海では、発展の速度はやくなかったが、日本の器械製糸業とは異なった特質をもっていたことに注意しておく

必要がある。

ところで中国生糸のなかで広東糸と區別して、上海糸あるいは支那糸として示される生糸は、上海から輸出される生糸の総称であつて、必ずしも上海あるいはその付近で生産された生糸のみをさしているわけではない。上海糸には、江蘇、浙江両省だけでなく、湖北、四川、山東などの省で生産された生糸も含まれている。

従つて上海から輸出される器械糸にも、少量ではあるが湖北、四川、山東の省で生産された器械糸が含まれている。しかしこれらの省の器械糸は、製糸法や糸質の違いから本稿でいう上海器械糸には含めないことにする。というのはこれら省では上海式と異なる日本式製糸法が浸透しており、しかも黄糸の生産を主にしていたからである。本稿でいう上海器械糸とは、主要には上海の製糸工場で生産される生糸であるが、また無錫等の江浙地方の上海以外の地で生産される器械糸の多くも同一系統に属し、これらについては區別しないことにする。本稿でいう上海器械糸が、上海から輸出される器械糸の大部分を占めたことはいうまでもない。

註(1) 拙稿「中国における近代製糸業の展開」(『歴史学研究』四八九号)で製糸資本の問題を中心に検討したが、製糸女工および

繭取引の問題については、それぞれ「中国における製糸女工の狀態」(広島大学総合科学部紀要『地域文化研究』第六卷)、「江浙地方における繭取引について」(『史学研究』一五六号)で詳

しく分析した。

(2) 上海式製糸法というのは、ポール・ブリュナがもち込んだものであり、その具体的な特徴については本文中でふれる。上海式製糸法は上海から江蘇、浙江両省内の各地にひろがったと考えられるが、浙江省には日本式製糸法も浸透する。

一 生糸の世界市場成立と中国

開港を契機に、欧米諸国へのアジア生糸の輸出が増大していった。生糸の世界市場の本格的な成立は、一八五〇年代からの中国生糸の、六〇年代からの日本生糸の欧米諸国への輸出増加を指標としている。アジア生糸と欧米市場との結びつきはアジア諸国の開港を基本的な契機としているが、さらに一八五〇年代にフランスに發生し、六〇年代にはイタリアに波及した蚕病の流行によつてヨーロッパ養蚕業が打撃をうけたことや、フランスの模様織に代表されるような高級絹織物に比較してより安価な絹織物が流行するようになったことなどの、絹業をめぐる諸条件が欧米諸国のアジア生糸への需要をたかめ、くわえて運輸・通信手段の発達や国際金融面の整備が欧米諸国におけるアジア生糸輸入の増加を実現した。

一九世紀末までの欧米諸国のなかの最大の生糸消費国はフランスであるが、一九世紀中頃の蚕病の流行をきっかけにアジアの蚕種や生糸への需要がたかまった。もっともしばらくの間は、ロンドン市場を経由して間接的に輸入していた。一

八六〇年代になってフランス帝国郵船の航路が極東にまで達し、またスエズ運河が開通して以降、フランスにおけるアジア生糸の直輸入がすすんだが、上海からの生糸輸出状況を見ると、フランスを中心にしたヨーロッパ大陸向け輸出量がイギリス向け輸出量をこえるのは、一八七〇年代中頃になってからのようである。

アジア生糸の輸入増加は、蚕病克服後のヨーロッパ蚕糸業に打撃を与えた。フランスではアジア生糸の輸入増加によって国内産生糸の価格が低下し、蚕病を克服したばかりの養蚕業も大きな打撃をうけた。一八八〇年代後半のフランスの生糸生産量は、一八五〇年の約二二%に低下した。こうしてフランスの絹織物生産に使用される生糸総量に占める自国産生糸の比率も低下し、一八八〇年代後半のリオンの絹織物業についてみると、それは一三%程度でしかなく、日本と中国の生糸が五〇%以上を占めるようになった。イタリアでは一八六〇年代から七〇年代にかけてやはり生糸の生産量が減退したが、フランスと異なって徐々に回復し、アジアの諸国がすぐには生産に着手できなかった優良生糸の生産・輸出国として、なお一定の生糸生産量を維持していた。

絹織物業に伝統のあるフランスに対して、新興の絹織物業国であるアメリカ合衆国でもアジア生糸への需要はたかまっていたが、フランスよりは少し後の時期までロンドン市場經由で間接的に輸入していた。アメリカ合衆国の場合、直輸入の実

現はアメリカ太平洋郵船会社による中国航路の開設や、大陸横断鉄道の開通を条件としていた。

養蚕業が根づかなかったアメリカ合衆国では、当初から原料糸の大部分を日本や中国を主にした外国からの輸入に依存せねばならなかったが、一九世紀末から二〇世紀初にかけての生糸消費量の伸びには著しいものがあり、一八九五年と一九〇四年におけるヨーロッパとアメリカ合衆国の生糸消費量の変化を比較してみると、前者が約一八%の伸び率なのに対し、後者は七〇%以上である。二〇世紀にはいってアメリカ合衆国の生糸消費量がフランスのそれを上回るのであるが、「要スルニ欧州消費高ノ進歩ハ頗ル遅々タルモノナレハ、將來米国内市场ハ糸価ヲ支配シ且ツ全国消費力ノ多寡ハ一般糸況ニ一大影響ヲ及ホス可キコト、疑ヲ容レサル所ナリ」(説点は筆者)と、世界の生糸消費におけるアメリカ合衆国の支配的な地位の確立が明確に予測されるようになるのである。

ここに概観した、フランスとアメリカ合衆国を中心とした欧米諸国におけるアジア生糸の需要のたかまりのなかで、日本や中国における製糸業の革新がはじまった。この革新は、蚕糸業をめぐる国内の諸条件の違いだけでなく、生糸の主な輸出入先の違いとも関連してそれぞれ特徴を有することになった。

日本生糸の輸出入先は一八八〇年代中頃を画期に大きく変化するが、一八八〇年代中頃以前の主な輸出入先はヨーロッパで

あり、多くはフランスで消費されていた。しかし中国生糸と同じようにその品質が経糸用に適さず、用途は緯糸に限定されていた。フランスを中心としたヨーロッパ市場の経糸部面に日本生糸が進出できないという現状を前に、殖産興業政策の遂行のなかでの、当初の製糸業振興策はこの現状の打開に主目標をおいていた。その具体策の典型的な例が、外国人技師を招きヨーロッパの製糸技術をそのまま導入した富岡製糸場の設立であった。しかし日本製糸業の革新の主要な方向は、現実の経済状態との間の隔たりの大きい富岡製糸場型ではなく、ヨーロッパの製糸技術をより簡易にして導入した諏訪型製糸にむけられた。そしてこの革新の方向は、日本生糸の主な輸出先のヨーロッパからアメリカ合衆国への転換をともなっていた。

諏訪型製糸を技術的基礎とする日本製糸業は、とくに高品質ではなくとも品質の均一な生糸を大量に生産する方針をとり、日本生糸はアメリカ市場において主に絹織物の緯糸用として大量に需要されるようになった。高品質生糸の生産を担う少数の製糸家をうちに含みつつも、第一次世界大戦前の日本製糸業は、アメリカ市場向け緯糸用生糸の大量生産を基本に発展をとげていった。

中国でも、その速度はともかくとして製糸業の革新がみられた。中国ではやく近代的製糸業の発生をみたのは、上海と瓊徳、南海両県を中心にした広東省である。上海と広東の近

代的製糸業については、本稿に関係の深い生糸の質の問題を含め、様々の点で区別して考える必要がある。ここではさしあたって上海の場合が問題になるが、一八七〇年代に陳啓沅が広東に導入した近代的製糸業の技術段階については、次の三説があることだけを紹介しておこう。機械製糸説、改良足踏製糸説、足踏製糸説である。この問題をどうとらえるかは、上海の近代的製糸業との比較において、広東のその特質を明らかにするうえで重要であろう。

上海に最初の近代的製糸工場が開設されたのは、一八六一年のことである。この怡和洋行の資本による製糸工場をはじめ、その後しばらく上海では外国商社主導の下に製糸工場が開設されていった。民族資本の製糸工場が急速に増加するのは日清戦争後のことであるが、この過程にみられる上海における製糸業の革新の特徴は、ヨーロッパの製糸技術をそのまま導入したことである。上海では、工場によってはかなり後まで外国人技師がおかれていた。

上海にヨーロッパ式の器械製糸業が導入されたことに対して、日清戦争後に工場数が急増したこともあって、日本の蚕糸業界には警戒の必要を説くものもいた。また日清戦争後の金本位制の採用にもなって、国際的な銀相場の変動が日中兩國の生糸輸出に及ぼす影響も、日本蚕糸業界の議論の対象となった。ただ一九世紀末から二〇世紀初にかけての日本の蚕糸業界では、中国における器械製糸業の発展の潜在的な可能

性の大きさには警戒心を有していたが、生糸輸出における現実の中国生糸の脅威についてはさしあたって重大視していなかったようである。そこには日本の蚕糸業界の、中国製糸業の革新の度合と中国生糸の輸出先についての認識が関係していた。

たとえば日本の著名な生糸売込商の一つである原商店の一八九七年の荷主あて書面は、「現今支那大部の生糸は、所謂上海の七里糸及び最も粗悪なる広東糸と称する提糸の僅かに進歩したる者に過ぎされは、我邦の器械糸と用途を一にするものは僅少の部分なりとす」(説点は筆者)と記述している。輸出される中国生糸の大部分は在来の座繰糸であり、このころの広東糸でも、開港後から明治のはじめにかけて日本で多く輸出された「提糸」の改良された程度のものであり、日本の器械糸に匹敵するような生糸は僅かであるとみていたのである。そもそも中国には用途を同一にする生糸が少ないのであるから、銀相場の変動も日本の生糸輸出に大きな影響を及ぼさないということになる。また同じ原商店の一九〇八年の「生糸貿易概況」は、日本と中国の生糸輸出は「其仕向け先に其の品質に利害の關係全然相反」していると、品質の面だけでなく輸出先の違いも指摘している。それによれば、日本生糸は六割九分がアメリカ合衆国へ、三割一分がヨーロッパへ輸出されているのに対して、中国生糸は二割五分がアメリカ合衆国へ、七割五分がヨーロッパへ輸出されていた。

これらの資料にうかがえることの一つに中国製糸業の革新の遅さがあるが、良い品質の生糸が中国でまったく生産されていなかったわけではない。このことは両資料とも否定していないし、あとの資料は明確に「最優等」生糸の存在を指摘している。この「最優等」と表現されるような高品質の生糸こそ、上海器械糸である。上海器械糸の生糸の世界市場に占める位置については後に詳しく述べるが、その品質の優秀なことには日本でもはやくから注目していた。

一九世紀末のある資料は、「近年欧米ニ於ケル上海器械糸ノ名声ハ一年ニ増加シ、而モ其價格も本邦器械糸ニ比較シテ優レリト雖モ劣レルコトナシ」(説点は筆者)と、欧米市場において上海器械糸に対する評価がたかまり、相場もあがっていたことを記述している。上海器械糸の品質がよいことは多くの資料によって確認できるが、具体的にはほぼ共通して次の点が指摘されている。一、色が純白である。二、織度が斉一である。三、類節が少ない。四、強伸力に富む。このように糸質のよい上海器械糸の用途については、後にもふれるが、一般的に「優等織物ノ原料」に使用されていた。

生糸の世界市場の成立にともなつて、欧米市場におけるアジア生糸への需要が増大するなかで、中国においても上海と広東を中心に製糸業の革新がみられた。上海器械製糸業の発生にみられる製糸業の革新について、ここでは次の二点に注意しておきたい。第一は、その速度が遅いことである。怡和

洋行による最初の製糸工場の開設から日清戦争前までの期間に操業した工場はごく僅かであり、その後の速度も決してはやくなかった。第二は、欧米市場で高く評価されるような高品質の生糸を生産したことである。上海の器械製糸業は生産量より製品の品質に重点をおいていた点で、日本の器械製糸業の主流とは対照的であった。こうして生産されるようになった上海器械糸は、日本生糸に比較して生糸の世界市場に独特の位置を占めることになった。

註(一) 石井寛治『日本蚕糸業史分析』 東京大学出版会 一九七二年 二二三頁。

(2) 一九世紀の絹織物業に関する研究によれば、「一八六〇年ごろから在来の高級・上質品に代って並質・安価な絹製品に対する需要が国際的規模で発生」といわれる(服部春彦「一九世紀フランス絹工業の発達と世界市場」『史林』第五四卷三号)。このことが、ヨーロッパ生糸に比較して安価なアジア生糸への需要をたかめる一因になった。

(3) 秦惟人「清末湖州の蚕糸業と生糸の輸出」『中嶋敏先生古稀記念論集』下巻(汲古書院 一九八一年)所収。

(4) 農商務省農務局『伊仏之蚕糸業』 一九一六年 五九頁。

(5) 石井前掲書、二八頁の第三表参照。

(6) 『伊仏之蚕糸業』 七二―七三頁。

(7) 石井前掲書、二八頁の第三表および三二頁参照。

(8) 永瀬順弘「日本『産業革命期』におけるアメリカ絹業の発展」『桜美林大学紀要』(経済篇)第一二輯。

(9) 「仏国一九〇四年度ニ於ケル絹糸状況」『通商彙纂』明治三十九年一七号。

(10) 永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史』第三巻紡織 日本評論社 一九八三年 二三五―二三六頁。

(11) 鈴木智夫「清末・民初における民族資本の展開過程——広東の生糸業について——」『中国近代化の社会構造』(一九六〇年)所収。

(12) 清川雪彦「戦前中国の蚕糸業に関する若干の考察(一)——製糸技術の停滞性——」『経済研究』第二六卷三号。

(13) 農商務省生糸検査所『清国蚕糸業一斑』(一九二一年)、鴻巣久『支那蚕業之研究』(一九一九年)などである。

(14) この工場の創設過程および経営上の諸問題に関する最近の研究として、石井摩耶子「一八六〇年代の中国におけるイギリス資本の活動——ジャーディン・マセンソン商会の製糸工場経営——」『お茶の水史学』第二六・二七号)がある。

(15) 『横浜市史』第七卷 二二〇頁。

(16) 江浙地方の農村には足踏製糸がかなり普及しており、産繰糸というのは厳密には正しくない。ただここでは叙述の便宜上、白糸、黄糸、再繰糸の非蒸気器械糸をまとめて産繰糸と表現しておく。

(17) 『横浜市史』第九卷 四二三頁。

(18) 「上海ニ於ケル製糸業附無錫地方輸入ノ情況」『通商彙纂』六八号。

(19) 『伊仏之蚕糸業』 三三七頁。曾同春『中国糸業』 商務印書館 一九二九年 一二二頁。

(20) 農商務省農務局『世界之蚕糸業並人造絹糸(第二次)』一九二二年 四頁。

二 フランス市場と上海器械糸

中国では上海と広東を中心に製糸業の革新がみられたのであるが、すでにふれたように全般的に中国生糸は日本生糸と輸出先を異にしていた。簡単にいえば、日本生糸の輸出先は一八八〇年代中頃をさかいにアメリカ市場中心となつていったのに対して、中国生糸はヨーロッパ市場中心であつた。

そこで上海器械糸も全般的な中国生糸の傾向と同じであつたかどうか、まずその輸出先についてみておこう。一九〇五年までの上海からの生糸の輸出統計は、すでに秦惟人氏がまとめているから、ここではそれ以降、第一次世界大戦中までの期間の上海からの器械糸輸出統計を表一にまとめておいた。秦氏が整理した統計によれば、器械糸の輸出量がわかり始める一八九四年から一九六年の三年間はアメリカ市場向け輸出量が多く、それから一九〇二年頃まではアメリカ市場向け輸出量とヨーロッパ市場向け輸出量がほぼ等しくなるが、一九〇三年頃から器械糸のヨーロッパ市場向け輸出量がアメリカ市場向け輸出量をこえ始める。これ以降、第一次世界大戦前まで上海からの器械糸の輸出先は明確にヨーロッパ市場中心となる。一九〇五、〇六年頃から上海の製糸工場は安定し

て増加し始めるのであるが、生産された生糸の主要な市場はヨーロッパ市場、とりわけフランス市場であつた。第一次世界大戦前八年間の、上海からの器械糸の総輸出量に占めるフランス市場向け輸出量の比率を計算してみると、最低の年でも約五八・七%

表一 上海の器械糸輸出(担)

輸出先 年	イギリス	アメリカ合衆国	フランス	イタリア	その他	計
1906	9.13	2970.97	7958.40	1260.28	—	12198.78
1907	7.40	4078.58	8281.09	1182.99	—	13550.06
1908	2.91	3920.68	9518.93	1194.53	10.00	14647.05
1909	—	3165.53	12347.92	1543.79	26.88	17084.12
1910	5.01	3604.12	15291.79	2430.69	183.90	21515.51
1911	34.85	5402.38	13448.26	2303.30	49.65	21238.44
1912	180.95	7373.33	14929.88	2373.11	579.27	25436.54
1913	10.98	5677.35	17264.20	1039.96	120.30	24112.79
1914	207.26	10333.37	11257.82	723.10	1201.91	23723.46
1915	382.31	15301.45	19467.27	18.99	1566.35	36736.37
1916	338.45	14983.92	15915.04	54.62	1353.85	32645.88

註) Returns of Trade and Trade Reports, Shanghai, 1906-1916.

であり最高の年では約七二・三%である。

上海器械系の輸出先としてフランス市場が重要な位置を占めることはわかったが、それではフランス市場の側からみて、中国生糸および上海器械系はどのような位置を占めていたのであるか。統計の不明な年がかなりあるが、表二は一九世紀末から第一次世界大戦前までの期間の、リヨンの生糸検査所における各国生糸の検査量の割合を示している。この表は、厳密にはフランスにおける各国生糸の消費割合と一致しない。というのは、フランスから他のヨーロッパ諸国に再輸出される生糸もあるし、あるいはミラノの生糸検査所を通過してフランス市場にはいつてくる生糸もあるからである。しかしフランスにおける各国生糸の、おおよその消費割合を知ることとはできよう。

まず全体的な特徴について、概観しよう。アメリカ合衆国と異なつてフランスには蚕糸業の伝統があったが、全検査量に占める自国産生糸の比率は一八九〇年代から一九〇〇年代中頃にかけて一〇%前後から九%台へさがり、その後さらに低下している。一八八〇年代後半からみても絹織物生産における自国産生糸の消費割合は低下しつつづけており、まさに「内産生糸ノ如キハ補充額トシテ供給セラルト姿ニ

表二 リヨンにおける各国生糸の検査割合（百分比）

年	フランス	スペイン	ピエモン	イタリア	ハンガリー	ブルース	シリ	ベンガル	カシミール	支那	広東	日本	野蚕糸
1890	10.39	0.68	2.57	14.13	—	3.71	6.13	1.50	—	17.69	18.86	17.33	7.01
1891	12.72	0.84	2.61	14.73	—	4.02	5.47	0.92	—	16.09	15.81	21.19	5.60
1892	12.34	0.57	2.57	11.55	—	5.65	6.83	1.10	—	16.45	15.03	21.82	6.09
1893	9.61	0.44	1.97	11.10	—	4.20	5.56	1.46	—	18.57	20.86	21.24	4.99
1894	11.32	0.60	2.30	10.80	—	4.69	4.32	1.14	—	16.40	17.97	23.63	6.82
1895	12.62	0.36	1.55	9.16	—	5.19	6.91	1.63	—	15.64	16.50	24.08	6.36
1896	10.50	0.48	1.43	9.76	—	5.69	7.76	2.20	—	15.20	20.68	20.02	6.28
1897	11.77	0.53	1.89	9.30	—	5.06	7.05	1.83	—	17.81	21.02	17.86	5.88
1898	10.25	0.40	2.08	11.02	—	5.24	7.23	1.81	—	15.92	24.38	15.73	5.94
1899	9.94	0.34	1.74	8.72	—	6.96	5.71	1.70	—	17.40	26.00	13.17	8.32
1900	10.72	0.61	1.76	7.45	—	6.03	8.11	1.98	—	14.80	25.90	13.97	8.47
1906	9.26	0.64	1.26	10.67	0.57	7.24	7.18	2.62	—	12.00	21.56	16.60	10.40
1907	9.07	0.51	1.06	8.15	0.54	6.73	7.14	2.65	—	13.64	18.88	18.18	13.45
1908	8.37	0.65	1.08	8.17	0.80	6.25	5.58	1.69	—	16.70	20.74	15.48	14.49
1909	8.14	0.69	0.89	5.70	0.76	6.11	6.42	1.35	1.33	17.00	18.60	18.11	14.90
1910	7.64	0.63	0.93	6.73	0.95	5.08	4.86	1.73	0.63	18.15	21.35	22.50	8.82
1912	8.36	0.82	0.89	7.45	1.12	5.56	5.65	1.00	2.21	19.19	17.09	18.82	11.84
1913	6.90	0.83	0.80	8.23	0.85	4.60	5.51	0.92	1.51	19.52	18.71	22.77	8.85

註) 1890~1900年は『欧米蚕糸業視察報告書』27頁、1906~1910年は「各国生糸の生産及米仏に於ける需要の状況並に価格の便宜」(『大日本蚕糸会報』236号)、1912~1913年は「仏國蚕糸地方の現状並生糸絹織物需給状況」(『衣笠蚕友会報』145号)。なお1894年と1900年は合計が100にならないがそのままにしておいた。

シテ、消費ノ大部分ハ外国産糸ノ供給ニ係ルモノトス」(註
 点は筆者)といわれる状態になつてゐるのである。

次に、外国産生糸のなかでは中国生糸の占める割合が最も
 たかく、ついで日本生糸、イタリヤ生糸の順となつてゐる。

一九世紀末から二〇世紀初におけるアメリカ合衆国の生糸輸
 入に占める日本生糸の比率は、すでに四〇%台から五〇%台
 であつたが、これほどではないにしてもフランスの中国生糸
 への依存度はたかく、リヨンの生糸検査量の三〇%台、年
 よつては四〇%台を中国生糸が占めてゐる。

中国生糸のなかでは、「支那」の項に示されてゐる上海か
 ら輸出される生糸よりは、大部分の年において広東糸の占め
 る割合がたかい。しかし広東糸の占める割合が一九〇〇年前
 後にピークに達し、その後は低下する傾向を示してゐるのと
 は逆に、一度低下した上海糸の割合は一九〇〇年代後半から
 再上昇し始め、第一次世界大戦直前には広東糸の占める割合
 よりたかくなつてゐる。

上海からのフランス市場向け座繰糸の輸出量は、一九世紀
 末には二万担台から三万担台であつたが、二〇世紀にはい
 つて減少し始め、一九〇五年以降二万担台に回復することな
 く、年によつては一萬担台さえもわるようになった。地方、
 フランス市場向け器械糸の輸出量は二〇世紀にはいつてか
 ら、とりわけ一九〇〇年代の後半から顕著に増加していつ
 た。これらのことは、表二にみえる一九〇〇年代後半からの

リヨンの生糸検査量に占める上海糸の割合の再上昇傾向が、
 上海からの器械糸の輸出増によつて生じたものであることを
 示唆してゐるといえよう。

日本生糸とアメリカ市場との関係ほどではないにしても、
 上海からの器械糸の輸出先からはもちろん、フランス市場に
 占める各国生糸の割合からみても、上海器械糸とフランス市
 場とは密接な関係にあつたといえよう。この関係を規定した
 要因について考える場合、フランス絹織物業の特質と上海器
 械製糸業の特質という、二つの面から検討をくわえる必要が
 ある。

まず、フランス絹織物業の特質について検討しよう。フラ
 ンス絹織物業の中心地はリヨンであり、一九世紀中頃にはフ
 ランス絹織物の八〇%程度を生産してゐた。リヨン絹織物業
 の最大の特徴は高級織物の生産にあり、この頃のリヨンでは
 手織機によつて精巧な絹織物をつぎつぎと生産してゐた。他
 のヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国における絹織物業の勃興
 にもかかわらず、フランス絹織物がアメリカ合衆国について
 イギリスを中心に輸出されつづけた原因は、高級絹織物を生
 産し得る技巧を基礎にした国際競争力にあつた。

すでにふれるところがあつたように、一八六〇年頃から欧
 米諸国全域に、絹織物の需要が高級なものから安価で並質の
 ものにかわり始めていた。このためフランスからの純絹模様
 織のような高級絹織物の輸出が減少し、ヨーロッパのフラン

ス以外の諸国では流行の変化にそった絹織物業が発達し、またアメリカ合衆国でも南北戦争後に力織機の普及をともなつた絹織物業の発達があつた。

一八六〇年頃から始まつた欧米諸国の絹織物需要の変化につれて、フランス絹織物業も純絹無地物とか羊毛や綿との交織物の生産がふえ、また生産費を切下げるために力織機を導入するようになった。しかし流行の変化にそった絹織物の生産といつても、フランスの絹織物は比較的にはやはり上質であり、フランス絹織物業のそれまでの特質は簡単には失われなかつた。たとえば二〇世紀にはいつてからでも、「仏国ハ蚕糸ノ集散国及絹布ノ製産国トシテ依然各国ノ首位ヲ占メ、殊ニ精巧織物及新柄品ニ於テハ天下独歩ノ概アルモノト謂フ可シ」(説点は筆者)といわれているのである。二〇世紀初における世界各国の生糸消費量から考えると、引用した資料の前半部分については事実認識に疑問が残るが、フランス絹織物業が高級絹布生産にその独自性を保持していることはまぢがいなかつた。

一九世紀末から二〇世紀初になつても、フランス絹織物業の競争力は生産力の発達による安価な製品の大量生産にあるのではなく、品質の優秀さにあつたのである。ヨーロッパの他の諸国の絹織物業との関係について、「夫れ伊瑞独三国の製絹業は、近時大に進取の氣勢勃興せるものゝ如し。然れとも其精巧優美の技量を闘はずに及んでは、未だ以て仏国に凌

駕するものあるを見ず」(句説点は筆者)と称され、またアメリカ合衆国の絹織物業との関係では、「精巧極緻の点に到りては、未だ米國到底伊仏に及ぶへくもあらず」(説点は筆者)といわれているのである。

フランス絹織物業の他の諸国の絹織物業に対する競争力が製品の品質の優秀さにあつたことは、製品の輸出状況にもうかがうことができる。一九世紀末以降のフランス絹織物の最大の輸出先はイギリスであり、それにつぐのがアメリカ合衆国である。二〇世紀初から第一次世界大戦直前までの期間の、アメリカ合衆国における絹織物輸入額をみると、最大の輸入先はフランスであり常に総輸入額の四〇％台を占めている。すでに世界最大の生糸消費国となつていたアメリカ合衆国が、第一次世界大戦直前にいたるまでフランスから絹織物を輸入しているのである。しかも毎年の輸入額がほぼ一定していることは、フランス絹織物に固定した需要があつたことを示すのであり、フランス絹織物の輸入は自国産絹織物の供給不足を補うというよりは、自国では生産し得ない絹織物を確保するためであつたことを示唆しているといつてよからう。

生産される絹織物の質のよさにくわえて、フランス絹織物業のもう一つの特徴は、とりわけアメリカ絹織物業に顕著なように同一種類の製品を大量に生産するのではなく、多種類の製品を生産することにあつた。フランス絹織物業は、他の

表三 リヨンの絹織物業
機台数

年	機台数	
	手織機	力織機
1800	2,500	—
1812	12,000	—
1827	27,000	—
1852	65,000	—
1861	116,000	—
1872	115,000	5,000
1881	100,000	18,000
1890	72,000	20,000
1897	65,000	25,000
1900	37,000	30,000
1914	17,270	41,000
1924	5,413	45,454

註) 永源貢弘「19世紀末期におけるフランス蚕絹業の動向」(『桜美林エコノミクス』第5号)

諸国のそれに対するもう一つの競争力をこの点にもとめた。同一種類の製品の安価な大量生産ではなく、品質が優秀で多様な製品の生産というフランス絹織物業の特質は、使用される織機の変遷にも示されているように思える。フランスでは一八七〇年以降、本格的に力織機が導入され始めるが、高級絹織物の生産に用いられてきた手織機はすぐには駆逐されなかった。表三に、リヨンにおける織機数の変遷を示した。手織機数は一八六一年頃をピークにその後漸減し始めるが、それでもなお一九世紀を通じて力織機数が手織機数をこえることはなかった。

世界の絹織物需要の変化にまきこまれながらも、フランス絹織物業は製品の品質のよさと多様性をなおその特質として有していた。アメリカ絹織物業が安価な製品の大量生産を方針としていたのに対して、フランス絹織物業は製品の質を重視していたわけである。従って、アメリカ絹織物業との対比において、次のような指摘もなされるのである。「尚織物工

場の組織及経営の方法に於ても仏国は米國と其趣を異にし、米國が機械万能主義にして大規模の多量生産を目的とするに反し、仏國は職工の技術に信頼し工場規模も亦夫程大ならず」(説点は筆者)。力織機が普及しても、フランス絹織物業ではなお職工の技巧を尊重しているのである。

ここに概観したフランス絹織物業の特質は、その原料糸需要にも影響を及ぼすことになる。フランスにおける生糸需要の特徵の第一は、織度の齊一さや類節の有無等の糸の質に関する吟味が厳格なことであり、細糸の需要が多いことにくわえてこの点でも、日本生糸はフランス市場に進出しにくかったようである。第二の特徵は、アメリカ合衆国では同一種類の生糸を大量に需要したのに対して、フランスでは多種類の生糸を需要したことである。

上海における器械製糸業発生の一つの特徵は、すでにふれたようにヨーロッパの製糸技術をそのままとり入れたことである。それは、「ブルウナ線糸法」とよばれるものである。ポール・ブリュナは日本では富岡製糸場の開設を指導し、上海でも初期に製糸工場を開設した。ヨーロッパの製糸法の系譜にはフランス式とイタリア式とがあり、前者は煮練兼業、共撚式撚りかけ装置、再練を特徴としているのに対して、後者は煮練分業、ケンネル式撚りかけ装置、大枠直線を特徴とする。ブリュナがフランス人であったためか、上海の器械製糸業をフランス式だとする資料もあるが、正確にはイタリア

式である。

蒸氣力によつて鉄製の繰糸器械を運転し、イタリア式の製糸法によつて生産される上海器械糸については、すでに一九世紀末において日本の蚕糸業調査員が、「皆優等品ニシテ我國器械糸ノ優等品ヨリ尚數等ノ上ニ卓越スルモノアリ」と指摘し、日本の器械糸より品質がよいことを認めていた。しかし他方では、上海器械糸の品質のよさは認めつつも、その生産量は急速には増加しないであろうという予測もあつた。

器械糸の生産量の増加には、いうまでもなく原料繭の出まわり量等いろいろな条件が関係してくるが、上海の器械製糸業自体が「糸量に重きを置かず専ら優良糸製出本位」であるという特質をもつていた。上海の製糸工場では選繭を厳しくし、煮練分業によつて繰糸女工を煮繭と索緒作業から解放し、繰糸枠の回転数をおとすことによつて生産量の面よりは生糸の品質の面を重視した。

日本生糸がヨーロッパ市場から後退していった原因については、日本製糸業自体がアメリカ市場中心に転換していったことにもよるが、「又品質ノ粗悪ナル為メ欧州市場ニ排斥セラレムハ、当ニ与リテ之カ素因ヲ為スモノト謂フヘシ」という指摘があるように、より根本的な問題として品質の悪さがあつた。他方、上海器械糸については「少シク青黄色ヲ帯フルモ手触甚タ佳良ニシテ、其他ノ品位モ殆ント伊、仏ニ等シク、殊ニ低價ヲ以テ市場ニ歡迎セラレム」(いずれも読点は筆者)

と、その糸質はよく良質生糸として著名なイタリア生糸やフランス生糸に劣らず、しかも価格が比較的安いという理由で、ヨーロッパ市場で多く需要されたというのである。

上海器械糸の品質がよかつたことは、その相場にもうかがうことができる。たとえば、一九〇一年から〇五年の間のリヨンにおける各国生糸の相場をみると、上海器械糸はつねに日本器械糸よりもたかい、上海器械糸の多くは無錫繭を原料とした細糸であり、しかもここに述べてきたように品質がよかつたことが、高級絹織物生産に特質を有するフランスの市場で歓迎された第一の要因である。

アメリカ合衆国の生糸輸入に占める日本生糸の割合は、二〇世紀初で四〇%台から五〇%台であつた。それが、第一次世界大戦直前には七〇%前後にまで伸びていた。これに比較すれば、フランスでは広範な国の生糸を輸入していた。中国生糸をとつてみても、上海糸とともに品質のあまりよくない広東糸もかなり輸入していた。

上海器械糸だけをとつてみても、その品質は多様だつたようである。先に、上海器械糸の品質のよさを保障している条件の一つとして選繭の厳しさをあげたが、ある資料によれば、上海の製糸工場では大きさ、色、形、繭層の厚薄等によつて原料繭を一〇余種以上に仕訳していた。このため、たしかにイタリア生糸に匹敵するような撻度が斉一で頰節の少ないなどの品質のよい生糸も生産していたが、同時にそれ以下

の各種の生糸も生産しており、外国の生糸輸出商社の行方格付もかなり複雑なものになって⁽²⁶⁾いた。

このような生産され輸出される生糸の品質の非均一性は、アメリカ合衆国のように同一種類の織物を機杼によって大量生産する国では非常にきられる。しかしフランス絹織物業のように、かなり長期にわたって手織機が残存し、力織機を導入しても工場規模は比較的小さく、職工の技巧も尊重して各種の生糸を用いて多様な織物を生産する場合には、さして大きな障害とはならないであろう。むしろこのような絹織物業の特質が、多様な生糸を需要していたといったほうがよい。

このように、フランス絹織物業の特質と上海器械製糸業の特質からみて、上海器械糸はフランス市場に適合的な生糸であったということができよう。しかしこのことは、フランス市場を中心としたヨーロッパ市場からは後退していった日本生糸がアメリカ市場へ進出していったのとは反対に、上海器械糸のアメリカ市場への進出の困難さを示唆しているといえよう。次に、アメリカ市場における上海器械糸の位置について検討しよう。

註(1) 「清末潮州の蚕糸業と生糸の輸出」。

(2) 「三三年度中仏国蚕糸需給状況」『通商彙纂』二〇三号。

(3) 生糸検査所『欧米蚕糸業視察復命書』一九〇二年 六八頁。

農商務省生糸検査所『米国絹業一斑』一九一〇年 五一—五

二頁。

(4) 前掲泰論文。Returns of Trade and Trade Reports, Shanghai, 1906—1913.

(5) 服部春彦「一九世紀フランス絹工業の発達と世界市場」。

(6) 石井寛治『日本蚕糸業史分析』二〇頁。

(7) 前掲服部論文。

(8) 「仏国三六年絹業状況」『通商彙纂』明治三八年三二号。

(9) 原名合会社『欧米蚕業一斑』一九〇〇年 四頁、六九頁。

(10) 「米国絹業一斑」三二頁。「現時の戦乱と生糸貿易」『大日本蚕糸会報』二七三号。

(11) 「伊仏の蚕糸業」一二五頁。農商務省農務局『伊仏の蚕糸業に関する調査』一九二三年 四七頁。

(12) 「伊仏の蚕糸業に関する調査」四七頁。

(13) 永瀬順弘「一九世紀末期におけるフランス蚕絹業の動向」『桜美林エコノミックス』第五号。

(14) 「伊仏の蚕糸業に関する調査」四七頁。東亜研究所『支那蚕糸業研究』一九四三年 四一九頁。

(15) 蚕糸業同業組合中央会『支那蚕糸業大観』一九二九年 二二三頁。

(16) 『講座・日本技術の社会史』第三巻紡織 二二二—二二三頁。

(17) フランス式だとしてゐる資料には、たとえば小山久左衛門『南清製糸業視察復命書』(一九〇六年)がある。日本の富岡製糸場の場合、ブリュネがもち込んだ製糸法はフランス式だったようである。もっとも日本では、各地に器械製糸が拡大するなかで、イタリア式にしろフランス式にしろ実情にあったか

たちに改変され、両者の相違点ははっきりしなくなっていた
『講座・日本技術の社会史』第三卷紡織 二二三頁。

(18) 農商務省農務局『清国蚕糸業視察報告書』 一八九七年 四七頁。

(19) 「三〇年中紐育生糸商況」『通商彙纂』九六号。

(20) 東亜同文会調査編纂部『支那工業綜覧』 一九三一年 一九七頁。

(21) 『欧米蚕糸業視察復命書』 七三頁。

(22) 「里昂三八年中各国蚕糸ノ平均相場」『通商彙纂』明治三九年三三三号。イタリア生糸やフランス生糸の価格と比較してみても、この五年間に關する限り上海器械系の価格がとくに安いといふことはないが、ヨーロッパ市場では上海器械系に対して価格の面よりは、品質の面により強い期待があったのではなからうか。

(23) 「最近十ヶ年間の米国生糸消費量に就て」『衣笠蚕友会報』一〇七号。

(24) 「支那蚕糸業の現況如何」『大日本蚕糸会報』三三二二号。

(25) 『支那蚕糸業研究』 三三〇—三三二頁。

三 アメリカ力市場と上海器械系

アメリカ絹織物業は一八二〇年から三〇年の間におこり、当初はごく低級な絹製品を生産していた。また自国産生糸の確保のために、蚕糸業の保護も一九世紀中にはしばしば論議された。しかし蚕糸業に顕著な発達はみられず、一八九一年

には蚕糸業奨励制度も撤廃され、絹織物業のための原料糸の供給の外国への依存が決定的になった。⁽¹⁾ もちろん実際には、この間にアメリカ合衆国における外国産生糸の輸入は急速にすすんでいた。

アメリカ合衆国では、一八二〇年代から中国生糸の輸入がロンドン経由ですすんだ。当時のアメリカ絹織物業の生産品は低級なものであったこともあり、高価なヨーロッパ生糸よりは中国生糸が好まれ、五〇年代以降、中国生糸が主な原料糸となった。他方、日本生糸の輸出についてみると、開港後の江戸末期から明治初期にかけては大部分がヨーロッパ市場向けであり、一八七〇年代中頃でもアメリカ市場へは僅かしかはいつていなかった。⁽²⁾ 日本生糸のアメリカ合衆国向け輸 quantity がヨーロッパ向けのそれをはじめて上回り、総輸出量の過半を占めるのは一八八四年のことである。

日本生糸の輸出先は、一八七〇年代後半から八〇年代前半の間に急速にアメリカ合衆国中心に転換していった。すでにみたように一八九四年から九六年の三年間は、上海からの器械系のアメリカ合衆国向け輸出品はヨーロッパ向けのそれよりもかなり多かつた。このため一時期、上海器械系は「日本生糸の大敵」という認識も日本の蚕糸業界にはみられた。⁽³⁾ しかしまもなく、上海器械系の主な輸出品はヨーロッパ市場へ移行した。その原因をアメリカ市場の側から考えるためには、やはりまずアメリカ絹織物業の発展の特質について検討

する必要がある。

南北戦争後のアメリカ絹織物業の発展を特色づけるものは、力織機の急速な普及である。アメリカ合衆国では世界の他のどの国にも例をみないほど完全に、力織機による手織機の駆逐がすすんだ。表四に、アメリカ合衆国における絹織物業織機数の変遷を示した。一八八〇年にはまだかなりの数の手織機が残っているが、一八九〇年にはとくに広巾物において力織機の増加と手織機の減少が顕著であり、そして二〇世紀初には、手織機は全体的にはほぼ消滅しているのである。

力織機の普及がもたらす利点は、生産費を切り下げ絹織物を安価に大量生産することであった。従って、この利点をなくしてしまふような、原料糸の質の不均衡による撚糸あるいは織布作業の中断がきらわれた。このためアメリカ合衆国では大量の均一な質の生糸の需要がたかまり、小規模農家によって生産される中国産座繰糸はアメリカ市場に適合的でなくなった。中国生糸にかわってアメリカ市場に進出したのが日本生糸であり、座繰糸はもちろん、器械糸にしても小規模製

表四 アメリカ合衆国の絹織物業織機台数

年	広巾		小巾	
	力織機	手織機	力織機	手織機
1880	3,103	1,629	2,218	1,524
1890	14,866	413	5,956	1,334
1900	36,825	164	7,432	9
1905	47,725	0	8,400	0

註) 『横浜市史』第4巻上 109頁。

糸場が中心の時期までは、共同揚返や共同出荷体制をとってアメリカ市場の要請にこたえようとした。こうしてアメリカ市場に向けて、高品質ではないが品質の均一な生糸として、大量に輸出されるようになった日本の代表的な器械糸が信州上一番である。

力織機の普及を基礎にアメリカ絹織物業が急速に発展するなかで、その要請にこたえることによって発展した日本の器械製糸業はヨーロッパ市場だけでなく、イタリア生糸や後にみるように上海器械糸の進出によってアメリカ市場の経糸部面からも後退し、並質ではあるがその限りで品質の均一な生糸を緯糸用として大量にアメリカ市場へ輸出することになった。アメリカ合衆国の側からみても、その生糸総輸入量に占める日本生糸の割合はたかくなっていた。

ただ、次のことには注意しておく必要がある。一九〇七年の恐慌はアメリカ絹織物業界により安い原料糸の需要を生じさせ、広東糸の輸入が増加するという現象がみられた。この現象は一時的なものであったが、二〇世紀初には、アメリカ絹織物業界では生糸の価格の上昇傾向への対処として、日本以外の国からの生糸輸入の増進をはかり始めていた。

上海では一九〇五、〇六年頃から製糸工場数、繰糸設備数が安定して増加するようになるが、アメリカ合衆国における生糸需要の変動のきざしと、中国における上海や広東の製糸業の発達を、日本の蚕糸業関係者のなかには、「最早米国市

場ニ於テ日本生糸ノ独占ヲ許サムルノ実況ナレハ、各種ノ方面ニ向テ注意ヲ払フニ非サレハ、何時如何ニシテ本邦生糸貿易ノ大局ニ悪影響ヲ来タスニ至ルヤモ未タ知ルヘカラス」(読点は筆者)と、かなり深刻にとらえるものもいた。しかし第一次世界大戦前までに関する限り、中国生糸全般のヨーロッパ市場向け輸出中心の状態に大きな変化はなく、ここに予想されたようなアメリカ市場における中国生糸の脅威は、現実のものとはならなかった。

中国器械糸のなかでも、広東器械糸と上海器械糸ではアメリカ市場へのかかわり方に強弱の差がある。広東器械糸については別に検討を要するが、上海器械糸がアメリカ市場に不適合な原因は、その生産における量より質の重視であり、品質の多様性であった。とはいっても、上海器械糸も少量ではあれアメリカ市場に輸出されているのであり、そこでどのような用途にあてられていたかについては、ふれておく必要があろう。

先に、アメリカ絹織物業の特質から、需要する生糸は高品質であることよりは品質の均一性が要求されたことを指摘した。しかしこのことは、経糸についてはもう少し注意深くみる必要がある。経糸については、高速での織機の運転にたえられるような強伸力がもとめられるのである。この点に、日本生糸は難点があった。このため器械製糸業の発展によって中国生糸にかわってアメリカ市場に進出した日本生糸も、一

八九〇年代にはいつてからイタリア生糸の輸入や上海器械製糸業の勃興によって、経糸部面から後退しなければならなかったのである。「本邦糸は経糸に用いらるゝ者なきにあらざるも其数多からざるなり」とか、「本邦全輸出糸の一割乃至二割は経糸に供用せらるゝ」といわれるように、日本から輸出された生糸の大部分は緯糸用として扱われていた。

他方、上海器械糸については、「其良否共ニ米国ニ輸入スルモノハ、経糸ニ供セラルモノノ如シ。殊ニ其價格比較的低廉ナルヲ以テ、之ヲ需用スルモノ多シ。昨年ノ如キハ特ニ極太ノ生糸ヲ製造シテ、其織度十七中ヨリ二十一中迄ノ上等ノ生糸ヲ輸入シ、欧州生糸ノ代用トシテ一本経トシテ使用セラレタルモノ少ナカラス」(句読点は筆者)といわれている。

上海器械糸は、ヨーロッパ生糸の代替品として専ら経糸用に需要されていたのである。より具体的に指摘しておく、必ずしも第一次世界大戦前の状態について記述したものはないが、ある資料によれば、上海器械糸はイタリア生糸と同様に優良な靴下、広巾織物、それにリボンの経糸用に需要されていた。

上海器械糸は基本的にはアメリカ市場に不適合であり、輸入された上海器械糸は、日本生糸がさしあたって進出しなければならなかった経糸部面の一部を占めたにすぎなかった。上海器械糸はアメリカ市場の経糸部面においてヨーロッパ生糸の代替品としての位置を占めたのであり、さしあたっての主な競争相手

はイタリア生糸であった。

註(1) 永瀬順弘「日本『産業革命期』におけるアメリカ絹業の発展」
杉山伸也「幕末、明治初期における生糸輸出の数量的再検討
——ロンドン・リヨン市場の動向と外商——」『社会経済史学』
第四五巻三号。

第四五巻三号。

(3) 「生糸貿易に就て」『大日本蚕糸会報』一八一号。

(4) 「米国に於る支那器械糸の好評」『大日本蚕糸会報』三三三号。

(5) 『横浜市史』第四巻上 一一三頁。

(6) 『講座・日本技術の社会史』第三巻紡織 二二五頁、二二九
頁、二三六頁。

(7) 石井寛治『日本蚕糸業史分析』 四六頁。

(8) 『米国絹業一斑』 五三三頁。

(9) 『米国絹業一斑』 九五—九六頁。

(10) 早川直瀬『生糸と其貿易』 一九二八年 三七—四四頁。

(11) 『欧米蚕業一斑』 八頁、一四—一五頁。

(12) 『米国絹業一斑』 六一—六二頁。この資料に出てくる「一本
程」というのは、生糸を撚りあわすことなく程糸として使用す
るもので、織布作業の手数がはぶけると薄地物を織るのに適
していることから、二〇世紀はじめ頃より盛んに用いられるよ
うになった。イタリア生糸や上海器械糸に比較して強伸力に乏
しい日本生糸は、このような程糸にはほとんど用いられなかつ
たようである。『米国絹業一斑』 六八頁、九〇頁。「我優等生
糸は何故に欧州に輸出せられぬか」『大日本蚕糸会報』二二二
号。

(13) 『生糸と其貿易』 一一九頁。

四 第一次世界大戦と上海器械糸

輸出市場についてみると、上海器械糸はヨーロッパ向けが
中心であり、なかでもなお比較的高級な織物の生産を特質と
していたフランス絹織物業に多くが需要された。アメリカ市
場にも輸出されたが、イタリア生糸の勢力の強い経糸部面の
一角を占めただけであった。

上海器械製糸業は、主にフランス市場に生糸を輸出するこ
とによって、第一次世界大戦前の発展を上げていったわけだ
が、このフランスの生糸消費量は二〇世紀初にはすでに限界
に達していた。リヨンの絹織物年生産額は一八九七年に四億
フランに達した後、第一次世界大戦直前まで四億フランから
四億五、〇〇〇万フランの間で変化しつづけている。いま一
八九三年から一九〇二年までの一〇年間のリヨンの絹織物生
産額の年平均と、一九〇三年から一九一二年までの一〇年間
の年平均とを比較してみると、増加額は一、五〇〇万フラン
あまりでしかない。

このことは当然、生糸の消費量に影響してくるわけで、一
九〇七年から一九〇九年の間の統計が不明だが、表五からわかる
ように二〇世紀最初の二年間のフランスの生糸消費量は四
〇〇万キロ合に停滞している。生糸消費量に大きな伸びがみ
られないことは、ヨーロッパ全体についても指摘できる。こ

表五 世界各國の生糸消費量(千キロ)

年 国	1901	1902	1903	1904	1905	1906	1910	1911	1912
フランス	4,579.7	4,109.5	4,060	4,812	3,142	4,143	4,262	4,077	4,661
アメリカ合衆国	5,300.0	6,000.0	5,100	7,285	6,946	7,572	10,060	9,215	11,208
ドイツ	2,840.0	2,983.0	2,795	2,760	2,970	3,444	3,667	3,445	3,734
スイス	1,560.0	1,665.0	1,405	1,716	1,527	1,893	1,725	1,628	1,715
イギリス	720.0	761.0	622	744	660	675	580	502	642
オーストリア・ハンガリー	770.0	750.0	740	838	835	822	845	894	794
スペイン	195.0	205.0	180	165	180	137	140	150	151
イタリア	1,000.0	1,000.0	850	1,050	1,100	1,150	1,125	1,100	1,125
ロシア	1,400.0	1,514.0	1,340	960	995	1,234	1,688	1,720	1,700
インド	465.0	385.0	276	410	280	285	580	605	1,175
その他	600.0	630.0	585	660	720	926	664	718	856
計	19,429.7	20,002.57	17,953	21,400	19,305	22,281	25,336	24,054	27,761

註) 1901~1903年は『横浜市史』第8巻720~721頁, 1904~1906年は同第9巻343頁, 1910~1912年は「世界に於ける生糸の生産と其消費」(『通商公報』104号)。なお1902年と1905年は合計があわないがそのままにしておいた。

れに対してアメリカ合衆国の生糸消費量の伸びは著しく、二〇世紀最初の一〇年間に倍増している。そして一九一二年についてみると、世界の生糸総消費量に占めるアメリカ合衆国の消費量の割合は四〇%以上に達している。

ところで一八九〇年代後半から第一次世界大戦にいたるまでの期間、上海からの生糸の総輸出量は停滞的である。これは座繰糸の輸出減を補いさらに総輸出量を増加させるほどには、器械糸の輸出量が伸びなかったことに起因する。器械糸の輸出量が急速に伸びなかった原因には、上海器械製糸業者のものに内在している問題以外に、主要な輸出先であるフランスを中心としたヨーロッパ諸国の生糸消費量の停滞も関係していたであろう。

器械糸が、上海からの生糸総輸出量を増加の方向にひきあげるためには、市場面からいえば、ヨーロッパだけでなく消費量が顕著に増加しつつあるアメリカ合衆国にも、輸出を拡大しなければならぬ。そのためには、さしあたってアメリカ市場の経糸部面においてイタリア生糸との競争にうち勝つ必要がある。この課題の実現に、大きな可能性がひらけたのが第一次世界大戦期である。

第一次世界大戦の開始は、前月末まで生産の活発であったフランス絹織物業に打撃を与えた。ドイツがフランスに宣戦布告した一九一四年八月以降、フランス絹織物業界では織機の運転を中止するものが多く、絹織物生産額もかなり減少し

た。³⁾このため生糸の輸入も減少し、生糸価格も、たとえば上海器械糸についてみると第一次世界大戦開始直前から一九一五年一月の間に約二〇%近く下落した。⁴⁾第一次世界大戦の開始によるヨーロッパ絹織物業の打撃は、中国生糸を他の輸出先にもむかざるをえなくした。

第一次世界大戦の開始は、一時アメリカ絹織物業にも打撃を与えたが、大戦期間を通じてみると、この時期にアメリカ絹織物業は急速に拡大した。⁵⁾第一次世界大戦の開始がアメリカ絹織物業に打撃となった一つの側面は、これまでとくに経糸用生糸として需要されてきたヨーロッパ生糸の輸入が減少したことである。一九一四、一五兩年には大きな変化はみられなかったが、一九一六年にはいってイタリアやフランスからの生糸輸入額は激減した。⁶⁾

アメリカ市場へのヨーロッパ生糸の供給減は、中国生糸のアメリカ市場への進出をすすめることになった。その模様についてある資料は、「現に本邦独占市場たる米國に於て今や支那生糸は駁々として需用に應じつゝあるに在らずや」と述べている。⁷⁾こうした状態を、日本の蚕糸業界はかなり強い警戒心をもってみていた。すなわち中国生糸のアメリカ市場向け輸出の増加が今後とも持続するであろうとし、「此方面の蚕食者」に対して常に注意を払う必要が叫ばれるのである。⁸⁾

日本の商社のなかで中国生糸の輸出に力をいれていた三井物産の関係者が、「我々の商売では広東糸と上海糸と全く別

として売って居ります」というように、⁹⁾中国生糸のアメリカ市場向け輸出の増加といっても、上海糸と広東糸を區別してとりあげる必要がある。いま上海器械糸のみについてみると、第一次世界大戦の開始とともにアメリカ市場向け輸出量が急増しているが(表一を参照)、日本側でも「上海器械の細目物はリボン用、太目物はシャツ及び被服地用として米國筋の需要頗る増加の傾向あり」とみていた。¹⁰⁾その品質の近似性からいって第一次世界大戦の開始とともに輸入量が減少するおそれのあった——事実、一九一六年には輸入量が激減したが——ヨーロッパ生糸の代替品として、上海器械糸のアメリカ市場における需要がたかまっていたのであろう。

アメリカ市場における上海器械糸を含む中国生糸の輸入増加は、アメリカ合衆國でのヨーロッパ生糸の輸入減少の穴うめといった面からのみみて、一時的なものであったと考えることはできない。中国生糸の輸入増進には、日本による独占的生糸供給の状態の改善という面からも、アメリカ絹織物業界の期待がかけられていた。以前からアメリカの絹織物業界は中国生糸の輸入増進に関心を示していたが、具体的な増進策の遂行に着手するのは第一次世界大戦期からであった。上海器械糸についても、一九一六年にはアメリカ合衆國の機業家イギリスが上海に美鷹洋行を開設し、製糸工場に資金を貸し付けるなどして輸入の促進をはかっただけでなく、江浙皖糸廠繭業總公所に蚕糸業の改良もはたらきかけた。¹¹⁾このアメ

リカ絹織物業者の動向について、日本の蚕糸業関係者のなかには、「然るに今日こそ僅に一美鷹に過ぎざるも、今後幾十の美鷹来りて支那蚕業の開發を企図することなきを保せず」(註点は筆者)と、警告するものもいた。

この中国からの原料糸の輸入増進の動きが、決して個別の絹織物業者に限定されたものでなかつたことは、以下に述べるところから明らかである。一九一五年末には原料糸の供給の拡大をめざして、アメリカ絹業協会とニューヨーク生糸検査所は、中国生糸の検査結果と改良すべき点をまとめた文書を帰国する駐米中国外交官にたくし、北京政府が中国蚕糸業の改良にのり出すことを要望した。このことに関してアメリカ絹業協会は、「米國絹業家は原料供給地の拡張に關しては常に其の念頭を離れざる処にして、吾人の最も希望する原料糸の供給地あらんには十分之を援助し、其の發展に力を致すべきを辭せざるべし」と述べており、アメリカ絹織物業界が生糸供給国の拡大を重大視していたことがわかる。上海器械糸を含む中国生糸の輸入増進には、まさにアメリカ絹織物業界全体の期待がかけられていたのである。ほぼ同じ頃に、フランスの大手生糸輸出商を中心に中国合衆蚕桑改良会の創設が企図されているが、これはアメリカ側の中国蚕糸業へのはたらきかけに対抗したものであつたかもしれない。

第一次世界大戦後、アメリカ絹織物業界の中国生糸輸入増進のはたらきかけはいよいよ本格化した。一九一九年にはア

メリカ絹織物業界と上海の製糸家との間で、アメリカ生糸検査会社による上海生糸検査所の創設について一応の合意がなつたが、翌年中国にやってきたアメリカ絹業協会の糸業視察団との間での交渉を経て、一九二一年に上海生糸検査所の創設が決まり、翌年から業務を開始した。

アメリカ絹業協会会長のチャールズ・チニーを含む糸業視察団は、一九二〇年の三月から四月にかけて中国を訪れた。この糸業視察団は中国だけでなく日本にもやってきたが、日本での歓迎会の席上でチニーは、「惟ふに各位の宏量なる我等が原料の一部を貴国以外より採用する必要に迫られて居ると云ふことに付て充分之を諒として下さること、信ずるのであります」と述べている。戦時中の絹業協会の動きからみても、糸業視察団の目的が中国からの生糸の輸入増進にあつたことはいうまでもない。アメリカ合衆国のなかには、中国蚕糸業の改良、發達によつて日本の独占的生糸供給の狀態の現出を防ごうとする議論がはやくからあつたし、上海器械糸についても、一九二二年のアメリカ絹業協会の雑誌がその生産増を歓迎する旨を記述していた。

一方、中国の側でも、アメリカ合衆国が原料糸の供給国の拡大に迫られていることに注目するものもいたし、また外国貿易に占める生糸の位置の重要性を指摘し、國家が積極的に生糸輸出の増進をはかるべきだとする議論も展開されるようになる。さらにこれからの生糸輸出はアメリカ市場中心にす

すめるべきだとしたりえで、中国生糸がこれまでアメリカ市場にあまりうけ入れられなかった原因を明らかにし、その克服のための議論もされるようになった。⁽²⁰⁾

第一次世界大戦中から戦後にかけて、アメリカ絹織物業界は中国生糸の輸入増進をはかり、中国側にそれに呼応する動きもみられたのであるが、アメリカ絹織物業界がもつめた中国生糸の改良点は、上海糸と広東糸とは異なっていた。上海器械糸に対する要求は、質の面よりは量の面にあった。すわち、アメリカ市場の必要とするだけの生糸を供給し得るような増産体制を実現することであり、視察団はこの改良点についての第一の障碍を原料繭の不足においていた。⁽²¹⁾

第一次世界大戦中から戦後にかけての、中国生糸のアメリカ市場向け輸出の拡大のきざしが、実際にどのような結果になったかについては、あらためて検討しなければならないが、戦前に比較してさしあたって次のような変化があったことだけを指摘しておこう。

上海を中心とした地域ではヨーロッパ市場に適した細糸の生産が減少し、上海からヨーロッパ市場に輸出されるのは、この細糸と下等品の生糸、それに黄糸であるのに対して、アメリカ市場向けとしては、「従来経糸用として専ら優等品に限られたるが、戦後同国向需要の漸増により、最近其の範圍は中等品迄に拡大」するようになった。⁽²²⁾

戦後九年間の上海からの生糸輸出状況をみると、一九二〇

年代中頃から総輸出量が増加するようになる。生糸総輸出量を停滞状態から増加傾向にひき上げたのは、器械糸の輸出増である。器械糸の輸出先についてみると、アメリカ合衆国向け輸出量も増加しているが、それ以上にヨーロッパ市場向けが増加しており、戦前の輸出先の状態に大きな変化はなかったかのようである。⁽²³⁾しかしこの統計は、器械糸として黄糸も含めていることを考慮しなければならない。この黄器械糸は主に戦後に輸出が増加したが、その産地は四川、湖北、山東などの省であり、上海器械糸の仕向先別の輸出割合を知るためには、上海の器械糸輸出量から黄器械糸の輸出量を差し引いて算定しなければならない。

いま一九二五年、二六年の上海からの白器械糸の輸出先別割合を試算してみると、アメリカ合衆国向け輸出の割合は、一九二五年が約四七・九%、二六年が約五〇%であり、ヨーロッパ向け輸出の割合は、一九二五年が約五一・三%、二六年が約四八・八%となる。⁽²⁴⁾戦前に比較すると、アメリカ合衆国向け輸出の割合がかなりたかくなっているといえる。

註(1) 「戦時に於ける里昂市絹織物産額」『通商公報』二五五号。

資料の平均値には僅かではあるが誤差があり、計算しなおした値を示した。

(2) 秦惟人「清末湖州の蚕糸業と生糸の輸出」『Returns of Trade and Trade Reports, Shanghai, 1906—1913.』

(3) 「仏国絹貿易並絹工業の概況」『通商公報』一九九号。「歐

州戦乱の仏国工業に及ぼせる影響」『通商公報』二五五号。

(4) 「戦争と生糸価格」『通商公報』二七六号。

(5) 滝沢秀樹「明治末々大正期における日本蚕糸業の一断面——

『衣笠蚕友会報』『衣笠蚕報』について——」(甲)『甲南経済学論集』第一四卷三号。

(6) 『横浜市史』第五卷下 一七五頁。

(7) 「支那蚕糸業視察一斑」『衣笠蚕友会報』一三三三号。

(8) 『横浜市史』第一五卷 一三五—一三六頁。

(9) 「米国市場に於ける日本生糸の用途と各国生糸の競争状態」『大日本蚕糸会報』二八二二号。

(10) 『横浜市史』第一五卷 三〇七頁。

(11) 『横浜市史』第一卷 一一七頁。

(12) 「支那蚕糸業の将来を論ず」『衣笠蚕友会報』一四八号。

(13) 「支那及広東生糸に対する警告の臨末」『大日本蚕糸会報』二九〇号。

(14) 『支那蚕糸業大観』五三四—五三六頁。

(15) 米国絹業協会派遣員歓迎会「米国絹業協会派遣員歓迎会報告」一九二〇年、四八一—四九頁。

(16) 「支那蚕糸業改良論」『大日本蚕糸会報』三四一号。

(17) 「大正十年度米国絹業一斑」『衣笠蚕友会報』一九六号。

(18) 「広東蚕業改良方法」『中外経済週刊』第九号。

(19) 「民国以来糸経出口之消長」『中外経済週刊』三二二号。

(20) 李安「論吾国生糸業不振之主因及今後補救之方法」『上海総商會月報』第四卷七号。

(21) 「美国第二次糸業視察団團長報告在華考察糸業情形」『中外経

濟週刊』第三一号。

(22) 『支那蚕糸業大観』四一三頁。

(23) 『支那蚕糸業大観』四二—四三三頁。

(24) *Annual Trade Reports and Returns, 1925, 1926.*

おわりに

第一次世界大戦前の上海器械糸の輸出市場についてみると、まず第一にフランス市場との結びつきが強いことがいえる。一方アメリカ市場においては、イタリア生糸が優勢を占める経糸部面の一角に進出しただけであった。第一次世界大戦前の上海器械糸の発展は、市場面からいえば、主にフランス市場との結合によってもたらされたわけである。

フランスを中心にしたヨーロッパ市場、あるいはアメリカ市場の経糸部面は、日本生糸の輸出先としてあまり重要でない市場であった。従って生糸の世界市場において、上海器械糸はさしあたって日本生糸と強い競争関係にはなかった。

上海器械糸の生糸の世界市場におけるこのような位置は、上海器械糸業の展開のあり方と決して無関係ではなかった。日本ではヨーロッパの製糸技術を導入するにあたって、現実の経済状態に適合するように簡易化し、生産にあたっては並質ではあっても品質の均一な生糸を大量に生産し、労働生産性をあげることを中心とした方針にしていた。これとは対照的

に、上海ではヨーロッパの製糸技術をそのまま導入し、第一次世界大戦前までは独自に改変をくわえることはなかった。このため、器械製糸業の発展の速度は抑えられた。生糸の生産にあたっては労働生産性の向上を犠牲にしつつ、日本生糸にはみられなかったフランス市場の需要するような高品質糸を生産することになった。

上海器械糸の主な輸出先であったフランスは、二〇世紀初には世界の最大の生糸消費国としての地位をアメリカ合衆国にゆずってしまった。アメリカ合衆国の生糸消費には顕著な進展がみられ、世界の生糸消費を主導していったのに対して、フランスの生糸消費は停滞状態におちいった。従ってフランス市場を主な輸出先としている以上、上海器械糸の輸出量の伸びは制約されることになった。

上海器械糸の輸出先が、フランス市場からアメリカ市場に拡大するにあたって好機となったのが第一次世界大戦の開始である。まずアメリカ市場におけるイタリア生糸の輸入減少は、上海器械糸の経糸部面への進出の幅を広げた。それだけでなく戦中から戦後にかけて、日本の独占的な生糸供給の状態を改変するために、アメリカ絹織物業界は上海器械糸を含む中国生糸の輸入増進をはかった。

第一次世界大戦を画期にした、上海器械糸の輸出先拡大のきざしが、どのような結果に結びついたかについてはあらためて検討しなければならないが、アメリカ絹織物業界の要請

にこたえるためには、江浙地方の蚕糸業のかんりの改変を必要としたであろう。少なくとも製糸工場における製糸法の改変——そのためには設備の改良と資本の裏付が必要になる——だけでなく、生糸の大量生産を可能にするだけの原繭の確保が不可欠となり、この点については繭取引のあり方や座繰糸生産地の広範な残存が関係してくる。

（下関市立大学経済学部）

『衣笠蚕友会報』の利用にあたっては、甲南大学の滝沢秀樹、京都工芸繊維大学の濱崎實の両氏にお世話になった。感謝の意を表したい。

Shanghai Steam Filature Raw Silk in the International Silk Market

by Saburō Soda

The international silk market came into existence in the mid nineteenth century. Chinese and Japanese raw silk exports to the West reached a large scale. On the demand side, France and the United States dominated the market. Chinese raw silk was exported from Shanghai and Canton. Shanghai's exports included reexports from Shantung, Szechwan, Hupei and so forth, as well as domestically reeled raw silk and steam filature raw silk produced in Chekiang and Kiangsu. Steam filature raw silk was almost produced in Shanghai.

Steam filature raw silk appeared first in the Customs returns in 1894. Shanghai steam filature raw silk was mainly exported to France before the World War I. French silk manufacturers required better quality raw silk to produce high quality silks. Shanghai steam filature raw silk was superior to Japanese product. Japanese raw silk was mainly consumed by American silk manufacturers because of its standard quality. The United States overtook France and became the leading customer for raw silk in the early twentieth century. Shanghai steam filature raw silk export to the United States increased during the World War I. After the war, American silk manufacturers attempted to accelerate import of Chinese raw silk, in order to break the dominated state of supply by Japan.